

【2015-02-08】 ブルー・ア
ルタイトルを一杯



私は来た道に戻って、その日の午後にはサナトリウムに帰った。

薔薇のアーチを通して前庭まで行くと、シグニーとみどりとりラが私を出迎えてくれた。わずか三日会わなかっただけなのに、もう何年も会っていなかったような気がして、懐かしさに、思わず三人を抱きしめてしまった。

私たち四人はハートの食堂へ行き、飲み物を飲みながらこの三日間に体験したことを教え合った。シグニーが双方の聞き役となり、必要な知識を補足または訂正してくれたので、新しい知識をスムーズに共有することができた。

まず私から体験したことを話し、水晶、黒耀石以降の五つの浜辺の石の名前や対応するチャクラ、食べた果実の名前など、シグニーとの間でやり取りした情報が本当にそれでよいかどうか彼に尋ねたところ、内容はほぼ正しく伝わったとのことだった。私の第七、第一チャクラが、始めの二つのビーチで開かれた結果、潜在していたテレパシー能力が顕現したらしい。

人魚たちについては、いつの頃からか、知らぬ間にこの医療班の海に暮らすようになったのだという。イルカたちも時にはこの海にやってくるが、それは人魚たちに会いに来るためであって、定住はしていないようだ。イルカと人魚たちは兄弟のように仲がよいらしい。

ヒナから聞いた、人魚たちの不幸な歴史について話すと、みどりとりラが訪ねた歴史資料館の中に、そうした内容の記録があったことを教えてくれた。そこには人魚たちのいくつかの種類の模型が展示されていて、私が出会ったヒナにそっくりの模型もあったようだ。

医療班の地理については、私の探索した内容をシグニーに補足解説してもらい、以下のことがわかった。

医療班は、円周約百キロ、直径三十キロの六ぼう星を形成し、七つのクリスタルの浜辺に囲まれた、一つのクリスタルの岩盤から成る島である。

中心部にはサナトリウムがあり、その北東の山頂は高さ約555メートル。そこから南東のアマゾンナイトの入り江には、不死鳥の川が注ぎ込み、川の中流には、飛龍という瀧がある。あるときセントラルサンからこの島に飛来した、天空と水の守り神である不死鳥の飛ぶ姿が、時に龍のように見えることから、そのような名前が付けられた。不死鳥は、瀧の上方に棲むという。

山頂には水晶宮があり、鉱物の精霊、ユラを始めクリスタルの精霊たちがこの島を守っている。

島には六ぼう星の形に合わせた正六角形の環状幹線道路があり、そこから各所への道が伸びている。

以上が、この日私たちが共有した情報の概要だ。

私たち三人の訪問者は、その後しばらくの間、この六ぼう星の形をした島に滞在し、様々な場所を訪れ、新たな発見や体験を重ねることを楽しんだ。

この島が大いに気に入った私は、アキーラやライラ同様に、ここで一生暮らしたいという思いに駆られたが、地球に残してきたあまり丈夫でない母とたった一人の兄妹である妹のことを考えると、実現することの許されない夢だと知った。

私は好きな時に一人ビーチに出かけ、人魚たちと語り合ったり、ときにはイルカたちと遊んだりした。みどりやリラとアスレチックに出かけ、様々な身体をもった存在たちが独自の動き方で設備を使用するのを感じて眺めたり、心行くまで体を動かしたあと、岩地に囲まれた場所にある天然温泉に浸かることも楽しんだ。

そのほか、私がこの医療班の島で体験したことは、まだまだたくさんあり語りきることはできないが、一つだけ書き添えるとしたら、水晶宮に出かけたときのことだろう。

それは、私たちが医療班を離れる一日前だった。

私たち三人は、その日サナトリウムの噴水の前に集合し、向って左手後方の山頂にあるという水晶宮を訪ねることにした。

サナトリウムの敷地の奥には、うっそうと茂る森の中に、一つの細い道が上へと続いていた。

登山向きの服装に身を包んだ私たちは、午前の明るい太陽が様々な光りの彩とプリズムを投げかける樹々の間を、一步一步踏みしめるように登っていった。

白かった道は徐々に青味を帯び、次第に黄色味を帯びた土に変わっていった。もう、百五十メートルは登っただろうか。除々に勾配がきつくなり、巨大な六角柱の結晶がいたる所から顔を出し、青いキャンバスに白い絵の具を流したような岩肌やパステルグリーンの粉を吹き付けたような岩場が増えてきた。ここから頂上までは、大きな石英の一枚岩にでもなっているように見える。

間もなく道の姿は薄れ、私たちは、あちこちに伸びる六角柱の結晶の間を縫うように、あるいはそれをテコにして手足を掛け、ピラミッドの石段でも踏みしめるようにして登り、昼ごろにはようやく頂上にたどり着いた。

頂上は、一辺が約百メートル程の六角形の平面で、小ぶりの樹木があちこちに根を張っていた。歩く感覚はもはや土のそれではなく、まさにクリスタルのピラミッドの上を踏み歩くような硬い質感だった。土のあちこちには、白濁した石英の表面や結晶の柱が姿を見せている。

六角形の三つの辺には鳥居にも似たクリスタルのゲートがあり、私たちはその一つから水晶宮に入った。

海拔555メートルといわれる頂上の中心には、三方向から登ることができる岩くらがあり、その中央には透明なクリスタルのお宮がきらきらとした姿をみせていた。この小さな六角堂のようなお宮の真ん中には、六角形の部屋があり、円い台座の上には、あらゆる色に光る六ぼう星の立体、マカバが鎮座していた。

鳥居のゲートをくぐる少し前から、リラとみどりは、すでに鉱物の精霊達との通信を始めていたが、私にはまだ誰の姿も見えず、この場の守り主というユラの姿も見当たらなかった。

(僕には、まだ鉱物の精霊と話をする能力はないのかもしれない...)

そう思いながらもマカバに向かって一礼し、両手を合わせ心の中でユラを呼んだ。

(鉱物の精霊、ユラさん、私は地球から来たアルといいます。今日はここにお招きいただいたことを嬉しく思い、感謝します。願わくば、わたしに分かるようなかたちであなたが姿を現し、私にわかるような言葉であなたとお話できますように...)

真っ青な空を、白い雲がゆっくりと動いていく...。

水晶のお宮とマカバに映されたその雲が、いろいろな色と形に変わり、右に左に、上に斜めに動いていく...。

時折吹いてくるやさしい風にさえ、クリスタルのいのちが溢れるように感じられるというのに、私には依然、ユラや精霊たちからは、何の反応も感じられない。

いつの間にかそばに来ていたリラが、それは、私の感情体に幾層にも溜まった恐れと悲しみ、根深い自己不信という汚染物質が原因だという。その汚れのために、ユラたち精霊が私に近づくことができないのだと彼女に伝えているという。これは、地球人の大多数に見られる、歴史の中で継承され堆積された汚れなのだそうだ。ベガの巫女だったリラやアルタイル星に住むみどりにこうした感情体の汚れがないため、精霊たちも安心して姿を現せるらしい。

そういわれてみれば、もっともな話に思えた。

私たち地球の人間は、日々、大地から石油石炭、その他の資源を思うままに採掘し、それによって産業を興し経済を成長させることで文明社会を築いてきた。ところが、我々の活動の結果、地球は、いまでは海も大地も汚染物質に溢れ、資源は枯渇を始めている。

人は、人に対しては賃金や代価を支払うが、地球には何の代価も支払わない。土地とは、個人か、国家いずれかのものだと考えはするが、そのどちらにも属さない土地など人間には考える能力すらないのだ。だからただ、搾取に継ぐ搾取をひたすら繰り返すのみなのだ。そうした身勝手な行為に明け暮れるうちに、とうとう深層意識が罪悪感で溢れ返ったとしても不思議ではない。

。

(鉱物たちに心があり、言葉があるとすれば、これほど恐ろしい相手はいないだろう…。

私たち人間は、これまで、大切な地球という星に、一体何をしてあげたというのだらいう…。

そんな人間の一人である僕の前に、彼らが現れることができなかつたとしても何の不思議もないではないか…)

リラの通訳によれば、特に、二十世紀以降に人間が行った、二千回を超える核実験と広島・長崎へ原爆使用、原子力発電による海洋や大気への放射性元素の恒常的放出は、地球と鉱物界に計り知れない損壊を与え、それが、人間社会の福祉と健康にそのまま反映されているのだという。

どこかで漠然と感じていた、生きることの心地悪さ、罪悪感をずばり言い当てられた気がした。

鉱物界の悲痛な叫びと、強引に分離させられた深い悲しみが、内側から堰を切ったように溢れ出してきた。

「地球よ、地球よ…」

私は泣きながら地球の名を呼び、両手をついて、これまでの無慈悲な人類の罪業を詫び続けた。

精霊たちに、許してください、と心を搾り出して祈った。

どれくらいの時が過ぎたのだろう…。

ふと気がつくと、涙と鼻水でくしゃくしゃになった顔から水晶のいわくらに落ちた涙の雫が、新たなクリスタルの結晶に生まれ変わっている…。

見上げると、たくさんの鉱物の精霊たちが、それぞれの姿で佇み、私に微笑みかけていた。

彼らの体はみな、透明な光りのようなものでできていて、蝶のような羽をもったものもいれば、ハミングバードのような細い羽をもったもの、天の羽衣のような虹色の衣をまとった女性もいれば、幾何学模様の形に光っている精霊もいた。

蝶のような羽をもつ精霊の羽は、ときに二枚、四枚、八枚あるように見えた。

「あなたの祈りは天に届き、あなたが落とした涙は、私たちの世界にあるあなた方に対する恐れを溶かしてくれました。あなたの感情体にあった汚れは、すべて、あなたの星のシンボルである不死鳥が、一足早く星に持ち去ってくれました。それは今頃、星の太陽神殿の祭壇で、美しく生まれ変わった炎の捧げものとなって燃えていることでしょう。あなたの心からの祈りが、それを可能にしたのです」

音のない精妙な響きが語った。

彼女が、ウラニウムの精、ユラだった。

「鉄や石炭、金銀を始め、私たち鉱物は母なる地球の子供です。石油は、地球の血液であり、体液です。人類は、その私たちを母なる地球から掘り出し、幾分かを分け与えてもらうことで生きていくことができます。母なる地球は、あなた方人類という彼女の子供たちのためにも、その体を開きあなた方の必要を満たしてくれます。しかしあなた方人類が、必要以上に、無分別に彼女から搾取することを止めなければ、彼女のからだは乾き、血流は滞り、ついには病気となって死んでしまうでしょう。

あなた方人類は、鉄や銅から採掘を始め、やがて石炭・石油へと範囲を拡大し、最後にはいつも、わたしへと行き着きます。わたしの持つ強大な力を発見すると間もなく、あなた方の文明は崩壊し、地の面から消えていきます。それは、あなた方が決まって道を誤るため、わたしより先に進むことがなかったからです。

わたしたちウラニウムは、人類にとっては試金石であり、神にとっては安全装置なのです。私たちがなしには、あなた方の欲望が、必ずや私たちの母なる地球を殺してしまうでしょう。神はそれを許しません。それで、人類は私たちの強大な力によって、自らその文明を滅ぼすのです。そして、またゼロから創り始めることを、これまで何度か繰り返してきました。いまこそ、その記憶を取り戻し、今回こそ、同じ過ちを繰り返さないでください。古の神殿に刻まれた「汝自身を知れ」との箴言は、宇宙の仲間たちからの真摯な声であり、私たち鉱物界の声でもあるのです。どうか、自分自身を知ってください。

これが、私たち鉱物界の、人類に対する切なる願いであり、神への祈りなのです。私たちはお互い、地球という母の血を分けた子供であり、兄弟であり、神の子供であるのですから」

ユラがこう話した時、わたしは、旧約聖書にあるソドムとゴモラの話思い出した。

天からの炎が、不義に満ちたこの二つの町を一瞬にして焼き尽くしたという話だ。

死海の低地に当たる場所にあったというこの二つの町のみならず、死海そのものが魚の棲まない死の海としての誕生を得たのは、このときなのだと言ったことがある。

天からの炎が、ウラニウムを濃縮して作ったプルトニウムの爆発であったとすれば、核を爆破させたのは、それに関わった人類か誰かということになる…。

気がつくのと、ユラやすべての精霊たちの姿が陽炎のように揺れ、あちこちでひそひそ声が聞こえていたかと思うと、やがて完全に見えなくなった。

わたしたち三人は、水晶宮を囲んで心から感謝の祈りを捧げ、厳かな感覚を胸にゲートをくぐり頂上をあとにした。

【2015-02-08】 ブルー・アルタイルを一杯

<http://p.booklog.jp/book/94927>

著者 : b-svaha

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/b-svaha/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/94927>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/94927>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ